

第4分科会 人権確立をめざすまちづくり

部落問題をはじめとするさまざまな
人権問題の解決をめざすまちづくり
をどうすすめているか

②分散会

I はじめに

生きにくさという形で今の社会に存在している差別の現実、その現実に対する苛立ちや憤りや悩みを出し合い明らかにしていくとともに、「こんな取組が、こんな現実の受け止め方が、こんな人とのつながりが、光を与えてくれた」と、レポート報告はもちろん、参加者自身の取組も重ねていくことで、参加者一人一人が差別解消に向けて進んでいく道を見出せる、差別をなくす取組の熱となるエネルギーを感じ合える分散会にしたいという方向づけを行った上で報告、討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑰

～障がい者雇用で学んだこと～ (滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

三重 特別支援学校に勤めている。進路指導の課題として、就職した生徒が1年後にやめてしまう。悩みでもあり、怒りでもある。仕事の面でよりも、人間関係でやめてしまうのではないか。ジョブコーチをどうしているのか、面談、サポートをどうしているのか聴かせてほしい。

報告者 Aさん、Bさんは退社してしまった。ジョブコーチは1年はついてくれる。私生活もサポートしてくれ、徐々に手が離れていく。退社の理由として職場での人間関係もだが、半分は家庭の環境ということもある。だから、少し踏み込んで話をするようにしている。本人の収入を家族が使い込んでしまうこともあるので、支援者と相談をして会社の制度を使って保護することもしている。話を聞くと、心を開いてくれる。今勤めている4人は、人からの誘いを断れない。行きたくなくても断れない。給料も見せてしまう。本当は見せたくない。わかるために時間を割くことをいとわない。そうしないと、その人たちのことはわからない。

千葉 企業の方が報告されるのを聞いたのははじめて。3つ質問。①どういう経緯で報告したか、②私は障害者福祉の専門員をしているが、うまくいっている中で、どういった人がかかっているのか、③家庭に踏み込まないといけないと思ったその時に感じられたことは何か。

報告者 ①について。滋賀の市人教の大会では企業からも報告している。その中で選ばれた。②について。支援機関とのかかわり。初めは毎日、そのうち隔週、そして月一回と30分から1時間の滞在でかかわっていく。職場でのかかわりや会社のかかわりなどを見て、大丈夫だと思うと回数を減らしていく。何かあると相談できるので助かっている。③について。そこは重要。本人が解決できるならいいが、長く働いてもらいたいので、必要に応じて「こうさせてください」と家庭に踏み込んだりしている。

千葉 私は知的障害者で、郵便局の事務をしている。ジョブコーチは半年ぐらいついて、その後も生活支援員さんや会社と半年に1回ふり返りの会がある。「半年間どうだったか」と。Aさん、Bさんは自分のことが言えない。私も同じ状況があった。会社を休んだりした。でも、やっぱり周りが受け入れてくれたから乗り越えられた。会社も本人の能力をじっくり見た方がよいと思う。

奈良 報告者はどこの担当の部署でこのような役目をされているのか。また、障害者雇用をした人の処遇は。他との差異はあるのか。AさんやBさんの今のくらしはどうか。

報告者 私は総務課の人事担当で対応した。障害者雇用をした人の処遇は入社した時は非正規の1年契約。その先、正社員化を勧めている。Cさんは3年で正社員。給料も違ってくるので喜んでいった。中には4年、5年で正社員の人もある。Aさんは、もう一度うちに入ろうかなと話もあったが、でも入らなかった。Bさんは今連絡がとれていない。

兵庫 報告者の会社のように民間は雇用率を達成しなければと取り組んでいるが、中央の官庁は水増しをしていたりする。この状況をどう思っているか。うちの子どももいつかは正規に思っている。

報告者 雇用率2.3%、会社としては法令順守すべき。しかし、2.2%を達成すればいいやという考え方ではなく、ずっと働いてもらいたい。みんなが生活基盤をつくるのが我々会社の役目だと思っている。

福岡 私は特別支援学校で担任をしている。報告の中で「思いの壁を取り払う」というところで、少しもやもやを感じている。本当はだれとでも働ける職場をつくるのが理想。でも、現実は難しいので洗濯室を障害者雇用の場にしてしている。これは、学校の通常学級と特別支援学級の関係と似ているのではないか。そのようなことを企業がした場合、かえって壁ができるのではないかと思う。そのあたりの思いをもっと語ってほしい。

報告者 思い込みの壁を取り払うこと。他の部署はどう見ているのか。年に定期的に人権研修をしている。でも、本当に自分で体験しないとわからない。それに私は気づいた。思い込みの壁を取り払うためには、本当は先ほどの郵便局で働く方が

おっしゃったように、みんなの中に入って、壁もなくというのが理想だが、でも実際は見えないところでいろいろなことがあったりして、モチベーションが下がっていくことがあった。だから、同じような境遇の人と力を合わせて働いて、それを周りが認めて、少しずつ職場に入っていく。一つの取組として、今は一人別の職場で働いてもらっている。それは、我々がやってきた自信、裏付けがあるから。洗濯は毎日社員が取りに行く。洗濯物は間違ふことなくきちんと棚に並べられている。そんな事実を一つ一つ積み重ねていくことを大切にして、この先共に働く職場をめざしたい。

大分 私は小学校に勤務している。特別支援学級と似ているという話があったので、思い出したこと。社会性が欠けているというが、だれの社会性が欠けているのか。周りの人間がその人と一緒に働きたい、折り合いをつけて。そういう周りの人間、私も含めての社会性はどうか。重度の方と共に働ける社会性があるのか。知らないからできない。教育行政は「わける」という。みんなとできないことは分かれて生活。それがいいんだと学ばせられている。そんな人が社会をつくっている。差別はする側の問題。周りにどう教育するかが人権教育。その人にどう教育するかが特別支援教育。教室でできない子を待っていて、できない子が叱られる。そういう教室で育ってきた私たち。能力主義社会は能力主義教育によってつくられてきている。職場と教育はつながっているんだと最近すごく思う。だから、まず教育。教育の力は絶大。できない子の側に立つ教師、助け合う仲間づくり。共に過ごすこと。分けることをよしとする教育ではなく。

協力者 この実践はまさに同和教育。洗濯室はまさに解放子ども会。暮らしの中でつながろうとしている報告者は、同和教育を始めた高知県の先生と重なる。まさに差別解消の営みである。なぜCさんは声をかけられて涙があふれてきたのか。報告者とCさんの間に安心できる関係性があるから。その関係性はどうかやってつくってきたのか。語り合ってきたから。一緒に過ごしていない、分けられているから差別がある。だとすれば、分けられない。踏み込んでいく。そういったことが差別解消の取組。語り合うというのはすごい力になる。そういったことが討議の中で明らかにされてきたように思う。本日の後半、どのように語り合い、何をもちつながらっていくのか、どのようにつながりを広げていくのか、これから深めていければと思う。

—報告2—⑩

～障がいのある人が地域で働き暮らすこと、当たり前への挑戦～

(愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

兵庫 地域の方と分かり合えている取組だったと思う。私たち周りが「知る」ということについて具体的な取組をされているか教えてほしい。

報告者 以前から納涼祭や学園祭などの行事をやっている。そこに多くの人に来てくれていた。育成園の職員は360人いるが、そのほとんどが町内にいて、普段から顔なじみである。顔の見える関係性というのは田舎だからこそのよさ。だからかかわりがもてていると感じる。

福岡 特別支援学級の担任として、障害のある子どもたちとかかわってきた。自分が子どもの卒業後の進路を保障できているか、大人になった時でも友だちとのつながりができているか、自分の中でもやもやしている。実践の中で教育現場に望むことがあれば教えてほしい。

報告者 小学校の5年生と交流学习をしているが、やはり小さい時からかかわっていくことで障害のある人と抵抗なくかかわれる。大人になってからいきなりでは、どうかかわっていけばいいかわからない。でも、小さい頃からかかわりがあった人は、園の人に声をかけてくる。やはり、共に過ごす時間をつくっていくことが大切だと感じている。

千葉 働きながら暮らすこと、それはいいことだと思うが、働けない人の社会参加はどうしているのか。

報告者 育成園、学園にも働けない人もたくさんいる。その方々が社会参加するために、何をするとよいか日々迷っている。少しでも地域の方との交流、何かしら発信し続けていくことが大切だと感じている。

千葉 私は精神障害者の側にいる。人によってあたり前は多種多様でちがう。ひとくくりにしてほしくない。改めて思うのは、先入観で振り回されたくない。

千葉 地域で暮らし働く。緩やかに地域がやさしくなっているのではないかと。しかし、災害などが起こった時にそうではない雰囲気があったと報告があった。このことをどう教材化していくか、考えを聞かせてほしい。また、報告者自身の実践を続けているパワーの背景を教えてください。

報告者 避難してきた人々は、何とかたどり着いたが、家族の安否がわからない不安があるなど、だれも自分のことで精一杯な状況だったと思う。そんな中で、人と過ごすのが苦手な方に、落ち着ける場を少しでも早く準備できるかなど課題が見えてきたので、これからに生かしていきたい。また、自分自身のことについては、仕事で落ち込んだりしたときに園の利用者さんが気持ちを感じてまなざしを向けてくれる。それが自分自身のパワーになっている。

千葉 私は精神障害の当事者。不安定になってしまうと、生きている意味を考えてしまう。報告者は、障害のある人に対してどういう思いで接しているのか。どういうところがいいなと思って働いているのか教えてほしい。

兵庫 津久井やまゆり事件が起きた時に、施設側

として考えが変わったことはないか。また、報告の中で口述詩を紹介されたが、災害の時の避難所での問題点として感じたことを教えてほしい。

報告者 私自身多くのことはできないが、横にいて寄り添うことはできる。そういうスタンスで相談に乗ったりして取り組んできている。やまゆりの事件については、利用者さんがニュースなどを見てどこまでわかっているのかなと思っている。とても信じられない事件だと思っているが、今思えば自分の施設ではどうすればいいか具体的に行動にまでできていなかったと思う。また、紹介した口述詩が一番好きな詩であり、人として認められて生きていくというのはどなたにも共通する根幹の部分だと感じている。災害避難の時には、避難所で落ち着かない方には、仮設住宅ができるまで家族と共に過ごせる別の居場所を一家族だけになったが提供させていただいた。

Ⅲ 一日目の総括討論

協力者 これまでの討議の中で、あたり前に働ける、そこに働けない人への排除はないのか、私たちは残念ながら悔しい思いをもって、今差別がある世の中に存在している。その中で差別をなくしていこうという願いをもってここに集った一人一人である。今どうなんだと指摘をいただきながら進められていること、本当に大事なこと。だからこそ、一つ確認しておきたいことは、思いを込めて取り組んでいることをもって帰りたい。どう取り組むのかということを見つけて帰りたい。そんな総括討論にしていきたいと思う。

千葉 私は高校の同和教育専任教員。子どもたちには自分の失敗経験も語りながら同和教育に取り組んでいる。質問だが、担当も変わっていく会社の中で取り組んでいること、社内が変わってきたことを聞かせてほしい。

報告者 障害者雇用をした従業員に対しての面談は、必ず私ともう一人がペアで行っている。そうすることで、思いが引き継がれている。面談の中でその人の思いを引き出ししていく。そこにその人の生きづらさを見つけられるように努力している。

兵庫 討論の中で大分の先生がとてもよい意見を言ってくれたが、共に働く、共に生きる社会は、共に学ぶ学校からだとも私も考える。学校から障害者と出会う機会を奪って、どちらにも不幸な教育をしてきた。私が子どもの頃「そんなことをしたら特殊学級に入れるぞ」という教師がいた。この言葉を聞いて何を学ぶのか。自分とはちがう人間なんだという差別意識をすり込んできた。一緒に育たないから、会社に入って社員同士どう付き合っていくかわからない。地域の行事で、あるいは避難所で互いの存在が意識できない。そして、津久井やまゆり事件の被告のような考え方を生まれさせてしまう。でも、教育の力で変えていくことができると思う。私は今地域で障害者のちん

どんサービスをやっている。家に閉じこもりがちな障害者の人と一緒にいろいろな祭りに呼ばれて、衣装を着て堂々とステージに立っている。喜んでもらっている。

奈良 独居老人という言い方を聞いて、私はどきどきとする。独身高齢者と言われても私が当事者なら言われたくない。言葉以上に大事なものもあると思うが、言葉も大事にしていきたい。一人暮らし高齢者だったらまだ許容できる。私が思うのは、一人はだめという感覚をどこかでもってるような感じがする。一人も大事だと思う。一人でいることも大事だし、周りの人となつながらすることも大事だし、両方を大事にしていきたいと私は思う。

三重 司会の方が確認されたことに私も同感。先日「徴用工」の言い方を言い換える提案を国がした。私が2000年ごろから取り組んできているいわゆる従軍慰安婦問題も国連の人権の関係では旧日本軍による性奴隷被害者女性というふうに明確にちゃんと問題を指摘するようになっていく。私の仲間の当事者の方たちは、合理的配慮の配慮って何かと怒っている。言葉にこだわって、そして取組につなげるということは本当に大事だと思う。私は今、入院している子どもたちの学びを保障する学校に勤めている。常々特別支援学校という名前をつけていることに保護者が抵抗を示す場合がある。障害者扱いされたくないと思っている方が少なからずいるということ。その中で、うちの子どもたちは障害者なのかと自分に問い直すようにしている。私もアキレス腱を切って車いす生活をしたことがあるが、その場合障害者とは言わない。一時的に車いす、一時的に病院にいる方を障害者というのだろうか。私自身も健常者と思っていない。健常者、障害者と二分化するのではないと理解している。私は全国の教研集会で議論している時に、交流学习はいいと何度も報告があったし、国も勧めている。でも、交流学习から帰ってきた子どもが「楽しかったけど、仲間にはなれないと痛感した」と言った。仲間にはなれないということは、一緒の人としては認めてもらえないということ。この言葉を聞いて、本当にわけている教育って何なのかからスタートする必要を感じた。前任の学校で人数が多くなったので、隣の高校の教室を間借りすることになった。その時、高校の先生の抵抗が大きかった。何で来るのかと。子どもたち以上に大人が抵抗感を感じていた。しかし、数年経つと支援学校の高等部がある学校ということがあたり前になってきて先生たちの意識が変わってきた。そういう意味で、職場の中である部署だけ100%というのは、インクルーシブにつながるステップだと理解したい。夏にある人権フィールドワークである企業を訪ねた。その企業は障害のある方の一人暮らしを実現していくような取組をしていた。私たちが学んでいく必要がある。

千葉 よいレポートを聴かせていただいた。私のかかわった中で成績は良かったが、自分で排泄ができないので就職できない生徒がいた。企業の中には自力通勤、業務上差し支えないことができなければ採用されないという条件がある。私は考えるが、企業の中でもどこでも障害福祉サービスが使えるようになれば、今よりも多くの人が働けるのではないかと。そういうのを全国的に要望していかないかと思う。でも、大きな声になっていないのではないかと。障害者の中でも働ける人が採用されていくのではないかと。そばにだれかがつければもっと就職できるのではないかと。企業ですべてを解決できないかと思うので、公的サービスを活用していくのはどうか。

報告者 今働き方もいろいろ変わってきている。インターネットを活用したテレワークが、これから広がっていくと思う。会社に来られなくなった人が弊社でも一人だけテレワークで働いている。実際にできることが示されれば、やがて制度になっていく。でも、現実はずぐにはいけない。少しずつ範囲を広げていくように。

大分 私は小学校の教員をしている。娘に障害がある。小中学校は地元の学校に通わせた。地元の子どもたちと共に暮らすようにした。高校は、支援学校に行き、今就職に向けて現場実習などがんばっている。今日の報告を聴いて、ハード的な面もあるが、報告者のお二人が自分自身の見方が変わっていかれていることに魅かれたので、意見を言いたいと思う。私は自分に障害のある娘が生まれて、自分の中の差別心を娘が一枚一枚はがしてくれたように思う。できるとかできないという中で基準を考えていた自分に、そうでない世界があるということに気づかせてくれた。水平社宣言の中に人は尊敬すべき存在だとある。娘を見てもそう思う。障害があるから雇用を増やすとかあるが、私は一緒にいることが周りの私たちにとって素晴らしいことがあると実感している。一人一人がちがっていて、輝くものをもっているから、私も学べたし、見方が変わっていった。そういうことが根っこにあって、雇用とか共生とか形だけでなく考えていくとよいと思う。

IV 一日目のまとめ

協力者 最初の報告では、障害のある方を受け入れるセッションをつくり、会社として受け継いでいる取組が紹介された。次の報告では、会場からの質問によって、レポートには書かれていない部分も紹介していただいた。この2つの報告をもとに、会場から多くの貴重な意見が出た。「わかる」ことではなくて、共に暮らすことで偏見や思い込みを一枚一枚はがしていきける。学校教育から共に暮らすことができれば、互いを理解して生きづらさは解消していきけるのではないかと。

—報告3—⑬

～部落の話をするまでに～

(千葉県人教)

—主な質疑と意見—

三重 自分の思いをせきららに語っていただいて考えさせられた。報告の中に「高校に入ったら同和教育があるからね」というくだりがあるが、小中学校では学習されていないのか。私は失敗を重ねながら部落問題学習をしてきているが、その中で先輩教員からやはり家庭訪問をして親の思いをしっかりと聴いた上で学習を進めるべきだと学んできた。同和教育推進教員になるまでの報告者の実践の様子を教えてください。

報告者 私たちの地域の小中学校では部落問題学習はされていないと思う。人権教育としての学習は行われている。私は、同和教育推進教員になって、部落問題について知った。1年目は自分の中で葛藤があった。

兵庫 おじいさんや親から部落のことを子どもに教えてやってほしいとお願いをされたということだが、子どもに伝えること、その役が先生でいいのか。私が親なら、先生からということもあるが、最終的にはやはり親から伝えると思う。親と一緒に伝えていくという方法もあるのではないかと。

報告者 親と一緒に伝えるという方法、一番に考えている。Uさんは、長女や次女は同和教育をやっている高校で学んでいたが、一番下のRは高校に入ったばかりでまだ学んでいないから先生から伝えてやってほしいと言われた。でも、どうやって伝えればいいのか自分の中で悩んでいるし、まだ私はRにしっかりかかわれていないので、まだ話せていない。Uさんとは話をしているが、まずは、子どもとのかかわりからだと思っている。そして、もちろんUさんと一緒に伝えることが一番良いと思っている。CやA、Bに部落の話をしたのは、お母さんたちと話していると、同和教育を受けてないからなど、これ以上何を言ってもいいかわからないと言っているように思えたから。ただ、大事なことは、お母さん方やおじいさん、おばあさんたちの話を一緒に聴くことだなどと思っている。

千葉 自分のおばあさんは被差別部落出身。部落外に嫁いで、嫁いだ先でいじめを受けて、精神的に病んでしまった。今もその爪痕が残っている。差別を受けた側はずっと苦しんでいて、どうすればいいのだろうか。

三重 部落問題に自分なりにできることをしてきた。今お話のあったお母さんたちだからこそ、一緒に考えていく中でやっぱりお母さんたちからどう伝えるかということをおぼくたちは一緒に考えるべきではないか。質問だが、AやB、Cは今どう思っているのか教えてください。また、Aの友だちに対して、Aの出身のことを先生が伝えたと報告されたと思うが、そのあたりを詳しく教えてください。そして、そのことを報告者はどう思っ

ているのか教えてほしい。

大阪 共感しながら聞かせていただいた。自分には身体障害、精神障害がある。話すことの難しさを感じている。いろいろな親とつながっているのは、報告者の人となりだと思って聴いていた。9月にできるだけ早く部落問題のことを伝えたい、でもいろいろ葛藤もあるとおっしゃったが、現在はどう思ってるのか。また、もう一つ聴きたいのは、AやB、CやKはどう自分自身、進路に向き合うのか、お考えを聞きたい。

報告者 差別する側が悪い。当事者は自分たちでもある。だから、正しいことを知らなければいけないと最近ずっと思っている。三重県の方のお話を聞いて、自分は考えが浅かったと反省した。AのことをAの友人に伝えたのは私から。やはり本人からでないといけないこと。また、私は今も早く部落問題のことを伝えたいと思っている。そうすることで、早くいろいろな人とつながっていけると思う。進路についてなど話ができているのはAとだけ。車関係の仕事に興味があるといった話などをして、これからも一緒に考えていこうと話している。

兵庫 同和教育専任教員が千葉に5名と言われたが、今までもそうなのか。小中学校には配置されていないのか。自分の学校の先生たちとの連携はどうされているのか。

兵庫 これからがんばって取り組んでいただきたいので、厳しいことを言うが、とても危うい。とても多感な時期に友人に出身のことを報告者から伝えたのはとんでもない差別行為になる。人とのつながりを広げてほしいので丁寧に取り組んでほしい。運動とどうかかわっているかが核だと思う。運動につながってないところでカミングアウトするとつぶれてしまう場合がある。周りがどう受け止めるか、そこを育てないといけない。また、担任の先生の顔が見えてこない。同和教育推進教員が一人でがんばってもだめだと思う。学校全体として取り組んでいくべき。運動とつながってない限り、子どもは孤立していつてしまうので、ぜひつないでいてほしい。

報告者 私の地域では、法が切れて、同和教育推進教員は小中学校にはいなくなった。今日は、自分の危うさを改めて知ることができた。これからがんばっていききたい。

協力者 このレポートを書いた時につながれていないと書いたんだしたら、今日までにつながってきてほしいと思った。何で動かないのか。苛立ちも感じた。ただ、つながろうとも思わない周り、社会がある。声をあげたいけど聴こうともしない周りがある。そんな中で、報告者はかかわりたい、つながりたいんだと思っている。社会的立場の自覚はただ出身を伝えることではない。それは入り口の入り口。これから先差別をなくす人のつながりの中にぼくらはいるんだと思ってくれるところまで一緒にかかわっていくというのが伝えた

いところではないか。報告者もそこまでどうやったらつながれるのかを求めて今日があると思う。

—報告4—⑤

～誰もが地域であたりまえに暮らすために～

(奈良県人教)

—主な質疑と意見—

千葉 私には精神障害がある。落ち着きがないと通知表に書かれていて、問題があると言われていたのを聞いていた。問題があるというのは、人によって全然違うし、人によってこだわりがある。障害がある側として言いたいのは、あなた方が困っている周りの人って、当事者からすればあなた方に何を伝えたいかということを知ろうとする努力、気力があるのかと問いかけてたい。

大分 私は特別支援学校に勤めている。特別支援学校の子どもたちとかかわること、部落解放運動にかかわってきたときのこと、共通点があるなと思うのだが、報告者の方はどのように思っておられるかお聞きしたい。

報告者 私が出会った脳性麻痺のメンバーの人が「ぼくはどこにいてもだれから見ても、障害者だと分かる。そういう目でぼくは見られる。部落に生まれて差別を受けている方はだまっていたらわからない」とおっしゃった。その時私は、だまってなきやわからないからといって、だまっていなきやいけない苦しさがあると思うと答えた。どちらがということはないと思う。人としてされたらおかしいことに対してはおかしいと言っていくべきだと思う。もう就職されたメンバーの中には、小さい頃にいじめにあって、外で話をするのをあきらめてしまった、場面緘黙の方がいる。学校に行くのがしんどくて行けなかった。本当に自分のことを知ってほしいという気持ちが出始めて、携帯を使いながらコミュニケーションをとるようになっていった。今は就職している。その方と母校の小学校に販売に行くときがある。フラッシュバックにならないかなと心配した。行った時、その当時の先生に出会った。その方はものすごく喜んでいて。自分のことを知っていてくれる人の存在は大きい。

—報告5—⑨

～ある解放運動の歴史 トラの穴の29年～

(鳥取県人教)

—主な質疑と意見—

千葉 トラの穴の主体は何なのか。お二人は初めからかかわっているのか。

報告者 初めは部落の青年部の学習会として始めた。その時私が役員だった。解放同盟の方だけでなく、だれでも受け入れるようにして、学校の先生方、今は保育所の先生方も参加されるように広がっていった。主体は、本当に自主的なサークルとして続けてきている。

兵庫 一般の方の参加はどうか。

報告者 多くはないが。一般企業でお仕事をされている方など。

報告者 子どもを連れてきたお母さんもいる。おもしろい学習会だから行こうと誘い合って、子どもが20数名来たこともある。

兵庫 場所はどこの施設を利用しているのか。県内どこから参加者がいるのか。

報告者 私が生まれ育った地域の隣保館で行っている。メンバーは、テーマによって在日の方が多く来たりしたが、いつもテーマに沿った方が参加しているわけではない。

大分 つながり。弱さでつながるよりもユーモアや笑いをつながる方がよいのではないかと。

報告者 何よりも気楽に行き学べる雰囲気大切だと思う。続けていくために。笑いやユーモアは大事だと私も思う。人権教育となると、暗く重いイメージ。人の生きざまにふれるというのは楽しいことなのではないか。そんな中で人の誇りにふれる。そんな実践ができたらいいなと思う。

滋賀 部落差別だけをなくそうと思うのは無理だと思う。部落差別を核にして、障害者差別などを考えていくべきではないか。小中学校での部落問題学習などでは、江戸時代の身分制度があった頃の差別の形と、解放令以後みんな平等だとなった中で差別の形はちがうということを理解しておけば、差別している方がおかしいととらえるようになると思う。

協力者 何で人が集まるのか、その背景に差別の現実を深く学べる場所だということがあるから安心して行ける。また、こうあるべきという枠組みを決めてない。だから今が語れる。柔軟に聴いてもらえる場所。そんな報告だった。

V 総括討論

大分 部落問題を核にしていいのか。私はそれぞれが中心ではないのかと思うがどうか。

報告者 私がよく子どもたちに、フルーツというフルーツはないんだよと話をする。フルーツという思い浮かぶのは人によってちがう。人権課題も部落差別には部落差別の課題があって、障害者差別には障害者差別の課題がある。人権課題によってちがうところがある。個別の人権課題を見つけて学んでいかないと、あらゆる差別の解消にはつながらないのではないかと考えている。うちのサークルは初め中心は部落問題。部落問題を学んでも家に帰れば、ジェンダーの問題も考えていかないといけない。だから、一人の人間として様々な問題を学んで人としての幅を広げていきたい。

兵庫 人権教育が広がっているのはよいが、部抜き、差ぬき、部落問題をうすめていくために使われているようなところもあると思う。どこが中心なのか。部落の子どもが学校に来ない、何とかしたいと靴減らしの同和教育をやってきた全同教の先達たちの地道な解放教育がやがて様々な人権課題につながっていった。無理せず自分を大事にしなが、差別をなくしていく取組をしていく教育がこれから大事だと思う。

千葉 障害者福祉のヘルパーにかかわっている。この分散会に参加して、改めて一人でがんばらずに、人とのつながりの大切さを実感した。あすなろの家の実践に共感するところがたくさんあった。様々な機関とどう連携していこうかお聴きしたい。

報告者 あすなろのメンバーそれぞれに背景をもっている。その人のことをわかるためには、人とつながらないと教えていただけない。とにかく話を聴く。親の思い、願い、苦労などを聴かせていただく中で、その人の人生が見えてくる。その人だけでなく、その人が暮らす家族全体を支援させていただくことが多い。学校の先生や地域の人、そしてもちろん本人の気持ちを聴くようにしている。

大分 小学校に勤めている。あすなろの紙芝居でバカにする子どもたちと声が小さい子を怒る教師の行為の中にある差別性は、つながっていると思う。「社会で生きていけないぞ」という教師の言葉は、今のまま、ありのままでは生きていけないというメッセージを子どもに届けてしまう。そんな社会をつくってしまった。能力主義。ありのまま、助け合っていく社会、私たちの意識を変えていかなければいけないと思う。ボタンの着脱ができなくて、練習して練習してクラスの仲間と生活していく実践を別の会で聴いたが、私はそうではなくて、できないまま、できなかったけど、仲間がいてよかったという体験を積んでほしい。そんな仲間づくりが、職場でだれもが働き続けられる社会になるのではないかと。できたという成功体験を積みませるだけではなく、周りの人間が共に働きたい、暮らしたいと思うかどうかだと思ふ。そんな仲間づくりは、部落解放学習の原理原則でつくられてきたものだと私は学んだ。

千葉 この2日間で自分の言葉で言えることはただ一つ。今までのことが今になってようやく答え合わせの時が来たのではないかと。今までのことを貫きとおして自分たちをだめにするか、今までのことを少しでも変えようと思つてよくするか、それはその人次第だと思う。この会に参加できてよかった。

千葉 高校の推進教員をしている。討論の中の滋賀の報告者の回答で、普通高校に行き就職できないよりは、特別支援学校に行き就職した方がよいのではという発言があったように思うが、そのことについて報告者の方のご意見を聴きたい。

報告者 企業側として誤解を招くような表現があつてお詫びする。私が伝えたかったのは、公正採用する立場としては、入社試験をクリアした人を採用していく。知的障害のある方が選考基準に達していない場合は、障害の有無にかかわらず不採用とする。しかし、会社には障害者雇用の制度があるので、障害があるという前提で採用させていただく。将来的にがんばっていれば正社員になっていただく。だから、会社と学校側とでよく情

報交換をして、どういう道で採用をめざすか考えていくという意味で回答した。

報告者 レポートの中で紹介したCさんは続けて働いてもらっている中で正式採用にした。わが社では初のこと。その後、毎年のようにそういう人が出ている。わが社も変わったかなと思う。

兵庫 洗濯場だけに障害のある方だけを集めてというのが気になった。他の部署とつながって互い分かり合えるようにした方がよいと思った。みなさんで会社の中で共有する形にしてほしい。

千葉 質問というよりお願い。特別支援学校を卒業して就職した子どもがいる。その子は職場で嫌な思いをさせられている。会社の中の現実、空気がわからない中での障害者雇用は不安だし危険。また、1年契約のこの子どもの親は不況に入ってからリストラが始まれば、まず切られるのではないかと不安。どこまで保障されているのか。しっかりと位置づけをもって障害者の方の雇用をお願いしたい。また、Aさんに関しての報告の中で、疎外感を感じたとあった。他の部署に行った子どもが心配。企業の中で配慮はどうしているのか。

報告者 定期的な面談をしていくのは当然だが、支援者の方があるので、支援者と私とで1年間面談を継続していく。その後は、声かけ。それを定期的にやっていくこと。その中で問題が出てくれば対応していく。話をしていると不満、サインを出している。地道な活動。

千葉 相模原の事件を教材にして生徒と学んでいきたい。報告者の方の思いを聴きたい。

報告者 ゆっくり話ができている自分がある。断片的に知識を入れられているとは思えるが、自分は向き合えていないと感じている。風化させてはならないこと。自分たちがどうすればいいのか、向き合っていきたい。

兵庫 事件のことは世間からだんだんと忘れさらられていってしまう。大変な人権問題。殺人事件だから。人間の値打ちを生産性だけで測るような今の政府のやり方をしていたのでは、事件を起こした犯人のような人間が出てきてしまう。全人教の取組に入れてほしい。質問だが、千葉の報告者は新採から8年間養護学校に勤めたと言われたが、障害がある子どもと向き合って、どんなことを学んだのか。

報告者 一番初めにかかわった子ども。右手を動かしたくても動かせない現状があった。それなのに、自分はその子どもに給食を早く食べなさいなど言ってきた。なんてことをしていたんだ。その子どももがんばっていたのに。そこから子どもの見方が変わった。

兵庫 子どもはかわいい。人権教育は原点。そこを大事にしてほしい。

千葉 総括討論を聴いていて混乱している。部落問題や障害者問題といっても、いろいろな人がいて受け止めがあって、一言でくくれない。万引きをやめられない障害者にかかわっている。包丁を

向けて来る人。みなさんにお聞きしたい。今回の学びを今後どう情報発信していくか。まちづくりとして。企業がまちづくりをどうめざすのか。福祉法人はどうめざすのか。

兵庫 千葉の報告者の方は人権に自分からかかわられているので私はすばらしいと思う。これからはがんばってほしい。校区人権、地域の方も入っている。人権問題について自分の気づき、気持ち、学び、わからないことを話し合っている。みんなで学び、取り組みながらそれぞれに気づいている。それがまちづくりにかかわっているということかなと思う。やっぱり差別する方がおかしい。部落の方が中心に運動、勉強。保護者などを巻き込んだ学習会ができていってほしい。そして、みんなで考えていく。それが最終的にはまちづくりになると思う。

三重 まちづくり、いろいろな人と話をしている。あたり前は人によってちがう。自分のあたり前があたり前と思わない方がいい。ムラのおばあちゃん、自分たちのせいにしてている。でも、それはちがうと話している。だれがそう思わせてきたのか。それは自分。差別の現実を生み出している社会のことを知っておかないといけない。何が問題なのか。討論の中で相模原事件のことなど出てきたが、そんな事件が起きる社会をつくっているのはだれなのか。社会の一員という自覚。でも、社会を変えていける自分でもある。そう思ってまちづくりをしていきたい。

兵庫 尼崎で15年続けて人権祭に参加している。自分たちが楽しめる祭にしようとして取り組んでいる。障害者が家に閉じこもっていないで外に出ていくようにちんどんサークルをやっている。いろいろな立場の人とつながってまちづくりに取り組んでいる。

奈良 あすなろで報告者と一緒に社会福祉法人としてのまちづくりに取り組んでいる。あすなろの取組は「ともに学び、ともにのびる」という学校の理念から出発した。2015年団体を立ち上げ、月2回18時～20時子どもたちの学習会を始めた。その中で、食の課題が出てきた。新しくあすなろの家ができたので、子ども食堂も始めた。月に一回。それで食の課題が解決できるのかと思うが、子どもや地域の大人が顔を合わせる。つながりの貧困をなくすためにも続けていきたい。

協力者 あたり前は人によってちがう。自分のものさしをあてていくのではない。今の社会の現実。一緒にする。つながりの貧困を断つ。

滋賀 民生委員をしている。まちづくりというのは一番大きな課題。ともにここに住みたいと思えるようなまちづくり。お互いをもっともっと開いて、つながりをつくっていく。鳥取のトラの穴の取組、いろいろな人が集まって、でも気づくことは一つだよと言いたかったのではないか。私もいろいろなところに行って学んでいるが、地元のことをしっかり見つめていかないといけない。人と

人をどうつないでいくか。

大分 絵に自信をもった子ども。他のことも、この子が絵を描き続けられる社会。アート展をやることにした。その子の絵を描く場をつくろうとプロの方とつながっていった。一人の生徒の次を考えていくことで、広がりが出てきている。

千葉 ムラのおばあちゃんが私たちの研究会に話に来てくれた。私を差別した人は亡くなっていき、受けた私はずっと苦しいんだよと心の叫びを話してくれた。私はその叫びに答えられずにいる。どういうまちづくりをしたら、おばあちゃんに返していけるのか悩んでいる。差別解消のまちづくりは長くかかると思うが、つながりを豊かにしながら、少しずつ変えていく。

協力者 最後に報告者から一言ずつ。

報告者 2日間刺激を受けたり、エールを送っていただいた。器は大きさも深さも形も変えられる。これから会社や自分の器をいろいろな形に変えていきたい。

報告者 今回報告させていただいたことで、今までの自分を見つめることができた。自分の中で、してもらってあたり前と思っていた部分があった。情報発信という形で自分たちのできることを見つめ直していきたい。まちの中の一人一人の居場所づくりのよいスタートになった。仲間、地域と今後も進んでいきたい。

報告者 同和教育専任教員になって、保護者とは話はできて、まだ子どもたちと話ができていない。自分の中で目標が定まった。子どもたちとしっかりとつながっていきたい。

報告者 まちづくりは人づくりだなと感じている。これからも続けていきたいのは、小さな世代から、いろいろな人がいていいんだ、自分もその中の一人だから、自分のことも大事にして、あなたは今のままでいいんだよと伝えていきたい。

報告者 水平社宣言の「人間を尊敬することによって、自らを解放せん」という言葉が一番好きな言葉。真摯に取り組んでいるレポートに出会えてよかった。自分の実践にはまちづくりの視点がなかった。つなげて考えていなかった。でも、サークルで学んだ人がそれぞれ思いをもって生活に戻る。それは今日まちづくりにつながっているのかなと気づかされた。

報告者 この会場の雰囲気がとてもよかった。

VI まとめ

5本のレポートと討議の中で次のことが確認された。

一つは、人と人とのつながりが生きにくさや差別そのものを解消していく。だからこそ、私がつながる、つながっていくことが確認できた。

もう一つは、何をもってつながるか、差別に対する自分の立ち位置、立場の自覚を真ん中に置きながら、語り合うからこそ、差別をなくす仲間としての確かなつながりをつくることのできる、報

告や討議の中で居場所であったりとか、差別をなくす仲間とは何かというキーワードで確認された。

昨日の滋賀の報告からは、同じ立場として同じ思いをもった同士がつながり共感できるからこそ、安心できたり、それを洗濯室としてつくっていく。ただ、そこを居心地のいい場所で終わらせずに、そんな居場所を原動力に次につないでいく、自分の生活に活かしていく。そんな展望をもった実践に、つながれる場を広げてほしいという願いや思いを会場から重ねてもらうことで確認できた。会場からは、レポートのA、Bに自分自身を重ねて、仕事を休みがちだった自分を職場が受け入れてくれた、話ができる周りがあったからという思いであったりとか、報告者からも雇用率を達成しているから終わりじゃない、生活基盤をつくらうと思えているか、そんな職場をつくることだれもが働きやすい職場をつくらうことにつながる。参加者からは、障害者が人間関係をつくることや社会性が欠けているのではなくて、周りがこの人と一緒に働きたい、働ける環境をつくらうとしているか、排除している側に対してどんな教育や働きかけをしていくのかという形で重ねていただいた。ここで語り合える、話ができるからこそ、楽になれたり安心できたりする。一人の仲間のことを思い出したが、聴覚障害があるお姉ちゃんのことを、お母さんにお姉ちゃんがんばって生きているんや、もっと周りが考えてくれたらいいんやと言われ続けてきた。でも、その言葉の意味を理解できなかった彼女が、部落の仲間から、部落差別をなくすのに何で自分たちだけががんばらないといけないのかといった言葉によって、自分自身の中で自分を重ねることで、自分自身が不安や生きにくさをつくっていることに気づいたからこそ、差別をなくす一人として立っていく、そんな姿に重ねて聞かせてもらった。居場所は単なる居心地のいい場所ではなくて、ここに仲間がいるから、人がいるからこそ成立をする。そこで、語り合い楽になれたり、安心できるからこそ次に踏み出せる。そんな原動力になる場所だということが確認できた。

愛媛の報告からは、自分がつながるだけではなく、人と人をつないでいく。施設で生活していても、地域住民との関係をつくっていくことで、地域の中で一人の人として生きていくことを保障していく。仕事をつくる場をつくるだけでなく、生活を保障していく。そんな取組の中で、何かあったら警察に通報していた地域が、自分にできることをしていく、共に生きていく、そういった実践を届けていただいた。社会全体を見れば、法定雇用率の水増しの問題だったり、優生思想が引き起こした事件であったり、航空会社の搭乗拒否だったり、厳しい現実が存在しているものの、自分たちが生活している地域の中で、周りとの関係は変えていくことができる。一人の人として生きて

いくことを奪っている周りで生きている一人として、周りを変えていく私の挑戦として実践を届けていただいた。会場からは、働けない障害者もいるんだ、どのように共に地域で生きようとしているのかといった思いだったり、当たり前は人によってちがう、ひとくりにしないでほしい、先入観をもって見ないでほしい、自分が生きている意味を考えてしまうことがある、働くことでまともに給料がほしい、結婚したい、彼女がほしい、そんな自分の障害を打ち明けてくれた上で、いら立ちや憤り、生きづらさを語ってくれた参加者の方がいた。

総括では、多数がつくる社会によって当事者にとって生きづらい社会が生み出されてしまう。共に生きる、共に働く社会は共に生きる、学ぶ教育からなんだと重ねていただいた。一人であることがだめなわけではない、その人にとって生きやすい社会をつくらうとしているかどうか。障害がある我が子のこともできる、できないで決めていた。でも、娘や娘の友だちが自分の中の偏見や差別心をはいてくれた。そのことで、自分の生き方が広がった。差別をなくしたい、でも差別がある社会を自分もつくっている。生きにくさを生み出している。そう思わせている自分がある。様々な角度からみなさんに重ねていただいたことで、語り合うことで、認め合うことで、関係性を変えていく、つながりをつくっていくことで、差別をなくしていけることを確認できた。

千葉の報告からは、立場の自覚とは何かを投げかけてもらった。会場からは、立場の自覚、親やじいちゃん、ばあちゃんの代わりに先生がさせるものじゃない、親たちと学びながら共に伝えていく方法もあるという思いだったり、解放運動に出会えなかったばあちゃんと重ねて、差別する人は忘れていっても、差別された人はずっと傷が残ってしまう。親から伝えてほしい、でも自分たち教師が何をすることが問われている。伝えただけ、知っただけ終わってしまうと差別に直面して一人で終わってしまう。だから、受け止める周りを育ててほしい。そんな願いも込めてたくさん会場から重ねていただいた。立場の自覚は、出身であることをただ知るだけでなく、被差別の子に限る話でもない。このことは改めて確認したい。自分の前にどのような社会があって、その社会の中で自分がどう生きていくか、差別を許さない立場の自覚であることをあえて地区外のある子の姿で共有させてもらえたらと思う。部落に偏見を持っている。自分が運動することさえ理解してくれない母親を否定し続けてきた一人の後輩がいる。でも、出会って学んで気づいたからこそ、私が許せないのはお母さんではなくて、たった一人のお母さんに偏見や差別心を植え付けた部落差別を許せないんだ、それが自分自身が活動する理由なんだとその後輩は自覚していった。だからこそ、お母さんに正しく理解してほしいと自分が活動す

る姿を見せていった。自分にとって差別を許さない生き方を語り合う、差し出すからこそ、この関係の中に差別がないこと、この人だったら横に立ってくれる、この人の横に立ちたいというつながりを実感できる。それは子どもたち同士をつないでいくことに限らずに、例えば先生と親、先生と子ども、地域の人とも同じなんだということも確認したい。さらに、地域の人が何で話してくれたのかではなくて、どんな思いや願いをそこに込めて語ってくれたのか、地域の人が過去の被差別体験を話すということは、傷口をえぐることにもなる。だから、話してくれたらいい、話してくれてありがとうと受け身になることも簡単なこと。何かあった時に話してくれたらよかったのに、いつでも聞くのにと、相手に指を向けることも簡単なこと。法律に絡めて、これまでの相談体制に不備があったからこそ、国や地方公共団体の責務として相談体制の充実がうたわれている。行政に対して求めていることであつたとしても、じゃあ私たち一人一人は、周りの人の生きづらさ、不安やしんどさを聴ける自分になっているかと自分に指を向けていきたいと思う。私自身がそうありたいと思った一番のきっかけは、2006年に自ら命を絶った一人の後輩の存在。その時に、何で話してくれなかったのではなくて、何で聴ける自分じゃなかったのかと問うた自分がある。聴ける自分でありたいからこそ、やっぱり自分自身の生き方を示していきたい。

滋賀の報告者から、外から見ていた自分、仲間がいるからがんばれるんじゃないじゃなくて、会社の中でがんばらなければならない現実がある。「やっぱり」とか、「せつかく教えたのに」とかできないと思っている社内の見方があるから、Cが安心して話せる自分であるために、一人一人の暮らしの中に踏み込むことで、だれもが安心して働ける職場をつくるために、本社に異動した後も放っておけない現実があるからこそ、かわり続けている姿がある。偏見や差別を打ち砕いていく取組として、外から見ていた自分から中に入ることで一緒に変えていく。インターネット社会が進んだことによって、これまでと違う形で部落差別が発生している。部落差別解消推進法が指摘をしたように、自分たちの意思で立場を明かしていくカミングアウトに対して、他人がその人が公にされたくない情報を暴露していつてしまうアウティングという行為が繰り返されている社会がある。自分にとって打ち明ける理由があるからとか、この人だけには知っておいてほしい、この人と一緒に考えたい、いろいろな意味をそこに込めて打ち明けてきたことは、これまで同和教育の中で積み上げてきた取組だと思ふ。そういつたことが今ひっくり返されようとしている社会がある。10年前に立場を打ち明けた一人の後輩がいる。この後輩は差別をされてしまうのだが、言ったことを後悔していないと言つた。でも、2、3ヶ月前に改めてそ

の後輩としゃべった時に、実は半分は後悔していないと言えるけど、半分は自分が言わなかったらこんな思いをしなくてもよかったんじゃないかと打ち明けてくれた。だからこそ、立場を自覚した自分が差別をなくすつながりをつくるために、何をもって打ち明けていくのか、何をもってうちあけてくれたのか、そういったことを考え、つながりをつくっていくことも改めて確認したい。

奈良の報告からは、生きづらさの解消をする取組を届けていただいた。一緒に泣ける、でも常にだれかがとりにいるわけじゃない、差別してほしいくない、自分たちのことをちゃんと知ってほしい、わかってもらえる人を増やしていきたい、そこにいる人の分だけその人にとっての当たり前があることを届けていただいた。会場からは、1日目の「当たり前」に重ねて、落ち着きがない、問題がある、それも人によってちがう、先生たちも知ろうとしてくれているのかというメッセージだったり、報告者からも障害があるから差別をしていいんじゃない、人としていやなことをしてほしいくない、どんな差別であってもだまっていなくてはいけない苦しさがあるという形で重ねていただいた。その人が決めるその人にとっての当たり前を認め合える、それを差し出して自分のことも相手のことも認められるからこそ、共に生きる社会、人と人のつながりが差別をなくしていくことも確認できたと思う。

鳥取の報告からは、学んで気づいただけではやっぱり社会は変えられない、行動に移していく、差別をなくすつながりとは何かという提起をしていただいた。参加者が来てくれるから29年続けてきた。そこに人がいるから。その場所をつくり続けてきた2人の姿がある。私にとって自分自身が生まれた地域のことを否定してきた自分を変えてくれたのは、まちがいなく先生という存在がある。そんな姿に2人に重なるところがあった。参加者にとってこの場所が必要なんだ、ここにくるから自分の日常を保つことができる。ここに来ることで、それがエネルギーとなって、生活の中にある差別と向き合っていける。学び気づきただけでは社会は変わらない。行動に移していく。差別をなくすつながりとは何かということ具体的に届けていただいた。会場からは、今暮らしの中にどんな差別があるのか、それに対してどんな行動をしていくのか、学ぶだけで終わりにたくないという思い、気負わなくていい、そこに行けば学べる、聴いてもらえる自分が出せるといったことも重ねていただいた。総括の中でも、学びだけで終わってはいけない。これから自分がどうしていくか、どんな地域やまちをつくっていくのか、お互いが開いていくことで死ぬまでここにいたいと思えるまちをつくりたい、そんな思いも重ねてもらえた。差別をなくすつながりは、自分の生活の中にある、周りにある生きづらさや憤り、怒りに対して、向き合っていくこと、傍観者で終わら

ないことは、総括の中で参加者の「今までのことを貫き通そうとするのか、少しでも変えようとするのか」というこの言葉に集約したい。

居場所、差別をなくす仲間とは何か、奈良の報告の中に「そこに行けばだれかがいる」「死んだ方がましや」「思うようにできないから」「本当は言いたいことがあるんだ」「私はそれを否定はしませんが、私はあなたに死んでほしいくない」といった報告があったと思う。生きづらさとしての差別の現実、その事実を受け止めた上で自分の思いを返していく、生きづらさをなくしていく仲間とは何かを改めて確認してもえらえたと思う。

このような2日間の討議を通して、国が認めた差別に対して、そして国が許されないものとした差別に対して、具体的な行動につなげていく。この2日間の学びをぜひ明日からの実践につなげていただけたらと思う。